

# 七飯町桜町7 遺跡に見られる土石流跡について

七飯町歴史館 山田 央

## はじめに

発掘を行っているとしばしば検出される天災の爪痕。洪水、津波、地震、土石流、火山噴火、断層など、ヒトが対峙した自然現象の脅威が記されている。北海道におけるこういった天災の痕跡をまとめたのが『北海道の防災考古学～遺跡の発掘から見えてくる天災』である。

今回、この本に収められている七飯町桜町7 遺跡で検出された土石流の痕跡と遺構の関係について紹介する。

## 遺跡の概要

名 称：桜町7 遺跡（B－08－72）

調査期間：1998（平成10）年4月16日～11月30日

調査面積：2,060 m<sup>2</sup>

調査原因：都市計画街路事業工事に伴う事前調査

調査主体：七飯町教育委員会

主な時代：時期縄文時代前期～晩期、続縄文時代、近世

検出遺構：住居跡26軒、土坑121基、石囲炉2か所、焼土13か所、畝状遺構1か所



図1 遺跡位置図

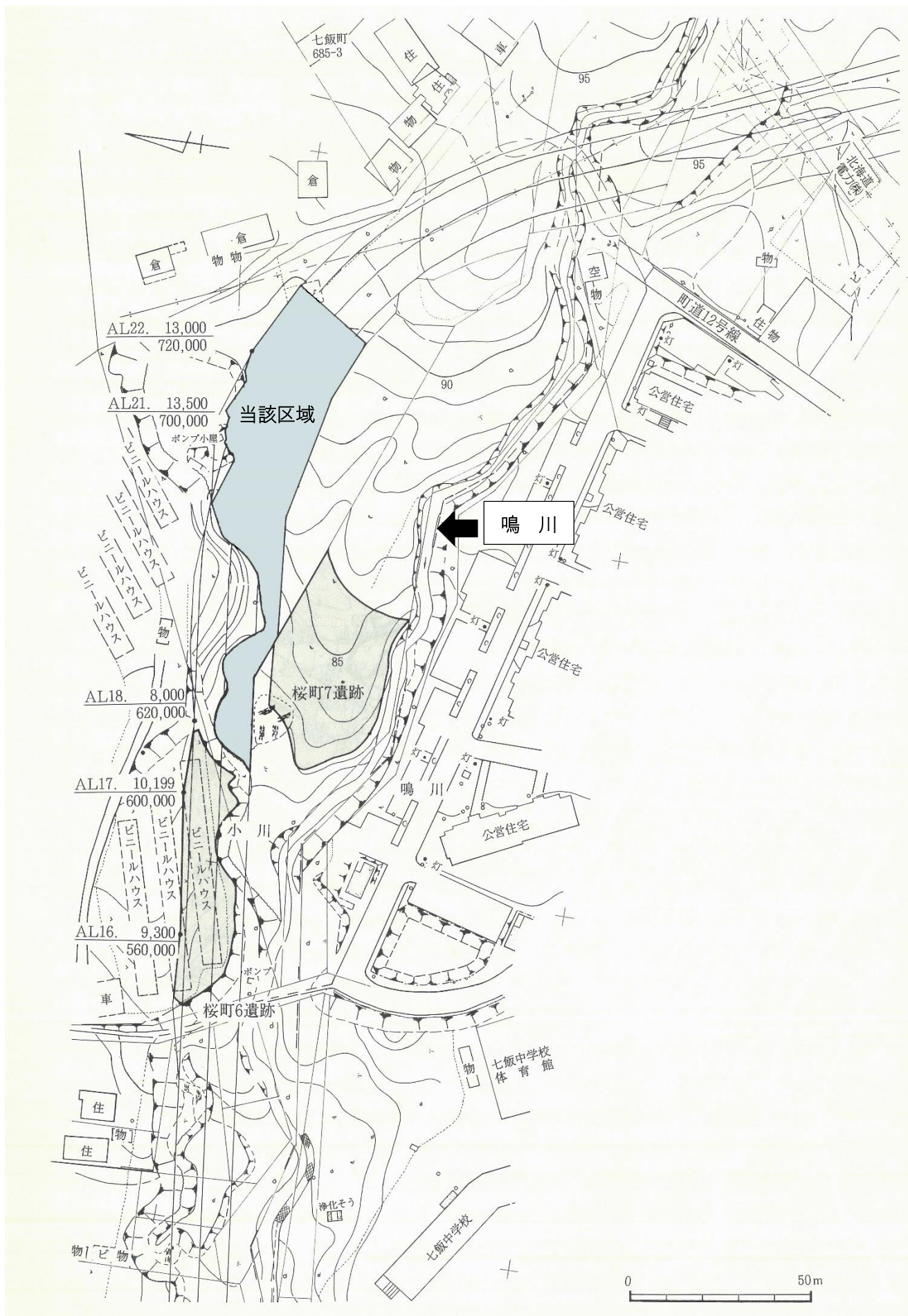


図2 遺跡周辺の地形



## 遺跡、鳴川、土石流跡の関係

遺跡は東から西へかけて形成された緩やかな斜面上に立地しており、南側へ約 50m の位置に調査区と並列するように鳴川が流れている（図 2 参照）。この鳴川は現在、ここよりも上流で二股に分岐しており、本流となる「鳴川」（図 2 に示唆）と支流の「第二鳴川」に分けられる。この分岐については、明治 10 年頃に描かれた「官私山林区別絵図（第 4 号 七飯町指定文化財）」で、現在と変わらない形で描かれていることから、少なくとも明治期からは変わらないことが伺えるが、鳴川を起点として扇状地が広がっていることから、調査対象となる縄文～続縄文期も同じだったとは考えにくい。あるいは、今回紹介する土石流も長年にわたり形成されてきた扇状地形の一因とみなすことができる。

調査区を概観すると、東端の約 20m は土石流による礫帯となっており（図 3 参照）、これにより、縄文中期末葉の遺構が破壊を受けている状況であった。本来は、住居跡など遺構本体部はさらに東側（礫帯部分まで）へ、広がっていた可能性もあるが、厚く堆積した礫によって調査を断念している。



図 3 桜町 7 遺跡 遺構分布図

## 直接被害のあった 2 号竪穴住居跡

桜町 7 遺跡において土石流によって破壊されたと考えられる遺構は、2 H、12H、13H、84P などであるが、その中で最も構築時期が新しいと考えられるのが 2 H (2 号竪穴住居跡) である (図 3 参照)。他の遺構にみられる覆土の堆積状況を観察すると、ほとんどの場合は、廃絶後に自然堆積によってある程度埋没しており、土石流は、それら堆積した覆土の一部を削るように残されている。しかし 2 H だけは、人頭大の礫が東側の壁面を大きく崩す形で大量に流入し、覆土も砂粒を多く含んだ層が幾重にもなっている状況で検出された。おそらく、直接的な土石流被害を被ったものと思われる。この 2 H の規模は、長軸 570 cm、短軸 430 cm、床面長軸 502 cm (残存部長軸)、床面短軸 404 cm、確認面からの深さ 102 cm である。

調査は、プランの確認時点で、すでに多量の礫が地表面に現れていたため、土層は 2 H のプランと地表面に現れている礫帯を繋ぐ形で設定し掘り進めた。すると大型な礫が、床面にまで到達しており、さらに覆土の上部でも、やや小型な礫が別の層を成して入り込んでいることがわかった。(図 4 土層図、写真 1 参照)

どの位の時間で、この 2 H が埋没したのかは想像の域を脱しないが、少なくとも、2 回にわたる礫の流入があったことが想定され、両者の間に厚く堆積した層は、土色や含まれる砂の量に違いはあるものの、ほとんどが砂層であり、やや波打つ形で自然堆積していることが確認された。

また、床面は不均一で凸凹しており、全体形も不整形なものだった。プラン上からは周辺遺構と重複しており、これらが廃絶した後に、掘り込まれた人為的な竪穴であることが確認されていたが、柱穴や周溝、先端ピットといった中期末に特徴的な付属施設が床面から全く見つからず、生活をした痕跡がほとんど見られなかった。このことから、2 H が、住居として機能していたとは考えにくく、むしろ構築中に土石流が発生し、大量の砂礫の流入を受けて埋没し、その後、再建されることなく廃絶した可能性が高い。(写真 2 参照)

覆土の状況から想像するに、まず、壁面から床面へと到達する土石流の進入とともに、多量の砂が入り込み、竪穴の大部分が土砂で埋まったこと、そして、第 2 波となる上部の礫層が、これらを覆う形で到達したことが考えられるが、2 回にわたる礫の流入が、別の要因で発生したものなのか、同一の土石流によるものなのかは、調査時点では明確にすることができなかった。ただ幸いなことに、覆土から人骨は見つからなかったため、人的被害はなかったと思いたい。

覆土からは、土器破片 16 点、や石器としては、擦石が 2 点見つかっている (図 5 参照)。土器片のほとんどは短刻線が施された 7 の土器のような縄文時代中期末葉と思われるが、中には 12 のように円筒下層式と思われるものも含まれる。すべてが 2 H に帰属するとは思えないのは、土石流による破壊時に外より流入した可能性も考慮すべきと考える。いずれにせよ、遺構の重複から 2 H が縄文時代中期末葉であると考えられる。



図4 2号竖穴住居 平面図・土層図

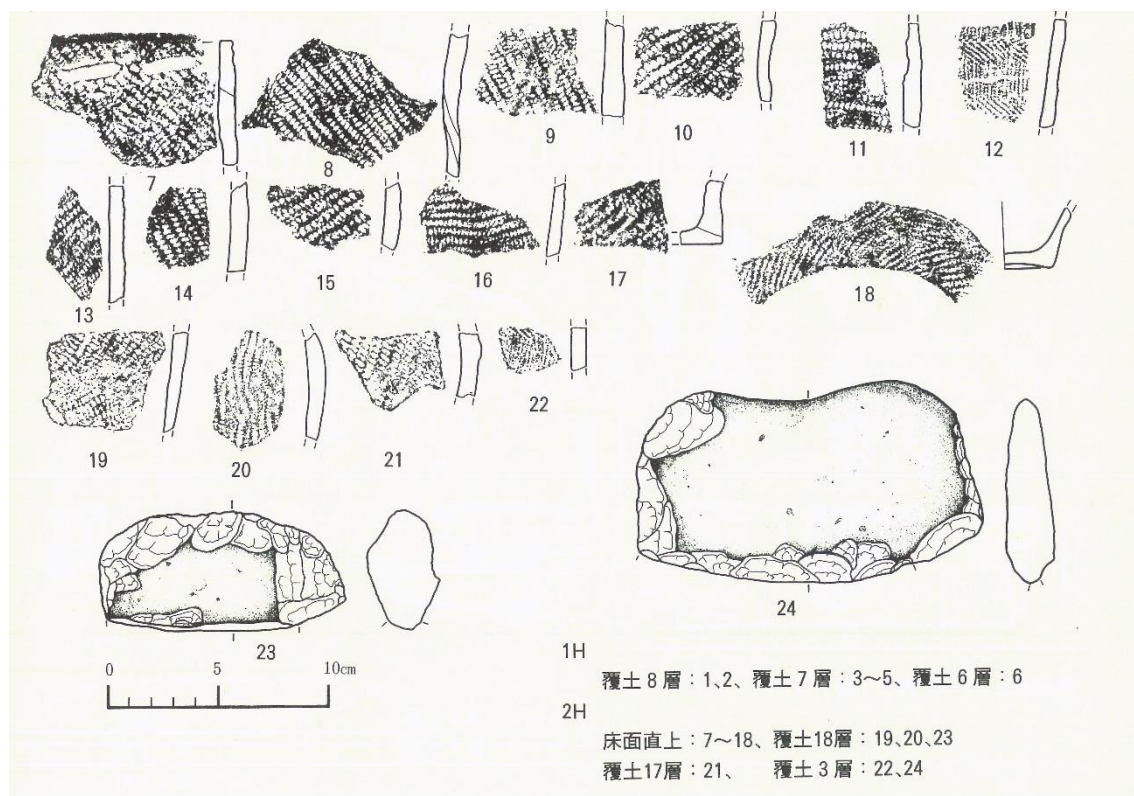


図5 2号竖穴住居 出土遺物





写真1 2H 土層堆積状況



写真2 2H 土石流流入状況